

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006年度～2008年度
課題番号：18300247
研究課題名（和文） 生活リスクの認知・対処および生活評価の構造に関する日米比較による実証研究
研究課題名（英文） An Empirical Study on the Structure of Perception, Coping toward Everyday Life Risk and Living Evaluation : Cross-cultural study between Japan and the U.S.
研究代表者 奈良由美子 (Yumiko NARA) 放送大学・教養学部・准教授 研究者番号80294180

研究成果の概要：本研究では、人々の生活リスクに対する認知・対処と生活評価の実態について、日本・米国での質問紙を用いた社会調査によって明らかにした。主な結果として、日本人は米国人に比べて生活リスクに対する不安の程度が高く、客観的な安全だけではなく主観的な安心を重視する傾向を強く示していた。さらに、日本人は自らリスク対処を実践していてもそれを充分効果的だとは評価しておらず、いっぼうで公助や共助にも大きな期待を持たずにいるという結果となった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
18年度	1,800,000	540,000	2,340,000
19年度	10,700,000	3,210,000	13,910,000
20年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	14,400,000	4,320,000	18,720,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：生活リスク、生活評価、安全と安心、リスクマネジメント、信頼、認知と対処、社会調査、日米比較

## 1. 研究開始当初の背景

リスクが具現化すると、その実害を被るのは多くの場合、個々の生活者である。リスクが増大化・多様化し、かつ自己責任原則の強調される近年にあって、生活者がリスクを評価し、対処できることの必要性が高まっている。本研究は、リスクを生活主体の目線からとらえ、生活者が管理主体となってリスクを認知・対処するという立場から、「生活リスク (everyday life risk)」にアプローチす

るものである。すなわち、生活システムの内外に潜在しているところの、生活システムの環境適応を阻害する要因を生活リスクととらえ、生活リスクを生活者が主体的に管理することを生活経営に導入することの意義と方法、実態および課題を明らかにすることが本研究の大きなねらいとなっている。

生活者（あるいは市民）とリスクについては生活科学や社会心理学等でいくつかの見べき実証研究が行われている。本研究は、

①一般成人を対象としながら無作為抽出により調査対象を選定するものである、②リスク認知および対処に影響を及ぼす変数を構造的に盛り込んだ設計になっている、③生活者をネット空間と日常生活の2つの社会システムに同時に属するサブシステムとしてとらえ、双方におけるリスク認知・対処の比較を試みる、④同じ調査票による日本・米国（一般にリスク管理先進国としてとらえられる）の国際比較調査である、⑤リスク認知と対処の、生活全体についての評価への影響を見ることで、生活にリスク管理を導入することの意義を実証する、⑥生活リスクをめぐる「安全」と「安心」の違いを明らかにし、生活者が主観的にも生活の安寧を実感できる生活システムのあり方を検討する、といった特徴をもって生活リスクへのアプローチを試みるものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、人々の生活リスクに対する認知・対処と生活評価の実態を把握し、両者の関係を明らかにすることを中心課題に据えながら、さまざまな生活状況の属性がそれらにどう関わっているかを、日本・米国での質問紙を用いた社会調査によって解明することを目的としている。ひとびとの生活リスクの認知・対処および生活評価の構造を実証的に把握することにより、生活評価を高めるためのリスク管理の実際の・効果的な手がかりを得ることができると考えられ、その考察を踏まえて提言を行いたい。

同時に本課題は日米比較研究として行う。米国は一般に自己責任・自己表出の原則によるリスク管理の先進国とされるが、日本と米国では「安全」と「安心」のとらえ方・重視のしかたが違っていることや、環境やコンテキストならびにプロセスに関わる状況が異なっていることを実証的に明確にすることで、日本の風土にあったリスク管理のありかたを考察するものである。

## 3. 研究の方法

日本と米国において質問紙を用いた調査を実施した。調査フレームは以下のとおりである。調査期間[日本]20年2/13~2/29、[米国]20年2/23~3/28。調査会社[日本]日本リサーチセンター、[米国]GfK Custom Research North America。調査対象[2カ国]全国の20~69歳の男女。調査方法[日本][米国]ともに郵送調査。有効回収数[日本]1,050、[米国]509。

生活上起こりうる様々なリスク（地震、交通事故、犯罪、がん、原子力発電所の事故、食品への異物・薬物の混入、老後生活の経済

的逼迫、収入の減少、インターネット犯罪など19項目）を提示し、それぞれに対する不安の程度、自分に起こると思う確率、自分に生じる被害の大きさ、科学的に解明されている程度、自らの知識の程度、制御可能性の程度およびリスク対処の程度をたずねた。さらに、安全・安心についての意識項目、自然観や科学技術志向性などのリスク観、コスト許容度や自助意識などのリスクマネジメント観、公的・共的資源の入手程度もおさえた。

## 4. 研究成果

主な結果は以下のとおりである。

### (1) 生活者のリスク認知

ここでは、生活者のリスクに対する主観的な判断である不安の程度について、日本人の結果を図1に示す。

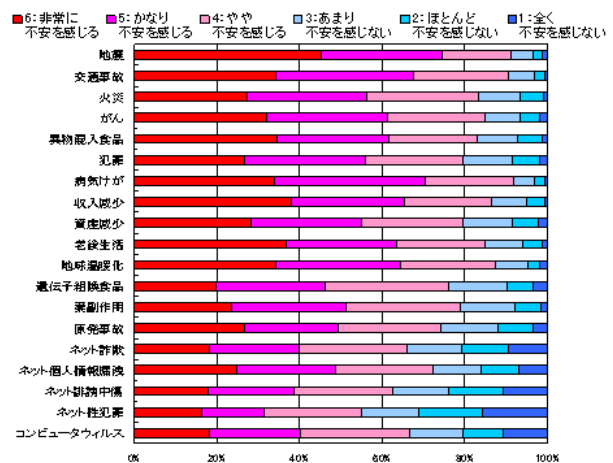


図1 生活リスクに対する不安の程度（日本）

19項目いずれについても高い程度で不安を感じている生活者の様子が伺える。「不安を感じる」（「非常に」・「かなり」・「やや」の小計）は、インターネット関連の項目では6割台のものもあるが、ほとんどが8割前後である。地震や交通事故、病気やけがといった伝統的なリスクへの不安がとくに高い。収入減少や老後生活などの経済的リスクにも大きな不安を感じている。地球温暖化や薬害、食品への異物混入といった比較的新しい科学技術に関連したリスクへの不安も大きい。

また、「本人が不安を感じているとしても科学的に安全ならそれでよい」との考え方についてどう思うかをたずねたところ、「全くそう思わない（17.2%）」・「あまりそう思わない（68.7%）」のする回答が、「たいへんそう思う（0.9%）」・「まあそう思う（12.1%）」を大きく上回っており、ここからも生活者が、安全だけでなく安心をも求める傾向の強いことが分かる。

上記の傾向は、日本人のほうがアメリカ人よりも強い。表1は、19項目のリスクについての両国の回答を示したものである。コンピュータウイルス（ns）をのぞくすべてのリスクについて日本人の不安の程度が統計的に有意に高くなっている。また、安心を志向する傾向も同様に日本人のほうが有意に強い。

表1 日本・米国の不安の程度

	地震	交通事故	火災	がん	異物や薬物の混入した食品
日本 (0)	5.07	4.89	4.59	4.70	4.70
アメリカ (0)	1.98	3.71	3.42	3.71	2.99

	犯罪に巻き込まれること	病気やけが	収入が減少すること	資産が減少すること	老後の生活での経済的困難
日本 (0)	4.52	4.92	4.84	4.52	4.78
アメリカ (0)	3.41	4.01	4.08	3.79	3.80

	地球温暖化	遺伝子組み換え食品による健康被害	薬の副作用	原子力発電所の事故	インターネット上の詐欺
日本 (0)	4.80	4.29	4.44	4.35	3.94
アメリカ (0)	3.11	3.13	3.56	2.70	3.40

	インターネット上の個人情報漏洩	インターネット上の誹謗中傷	インターネット上で性犯罪に巻き込まれること	コンピュータウイルス
日本 (0)	4.23	3.85	3.56	3.94
アメリカ (0)	4.01	3.04	2.72	3.83

(2) 個人属性による不安の差

不安の程度が年齢や性別などの属性によってどのように異なってくるかを調べた結果は次のようであった（統計的に有意な差が見られたことについて示す）。

①性別による違い：日本—がんとコンピュータウイルス以外のすべての項目で、女性の不安のほうが統計的に有意に高い。アメリカ—火災、がん、薬の副作用は女性の不安のほうが有意に高い。

②年齢による違い：日本—交通事故や火災などの伝統的リスクでは年齢差はほとんど見られない。経済的リスクでは、年齢が高くなるにつれて不安の程度はおおむね増加（40歳代・50歳代がピークで60歳代では小さくなる）。薬の副作用や遺伝子組み換え食品、地球温暖化、原子力等への不安は年齢とともに大きくなる。インターネット個人情報漏洩・ウイルスのリスクへの不安は若いひとほど高い。アメリカ—交通事故への不安は年齢が若いほど大きい。しかし、薬の副作用や病気・けがなど健康に関することは年齢とともに大きくなる。老後生活への不安は、20歳代では小さく、他の世代ではほぼ同じ水準で心配されているが、50歳代がピーク。ネットリスクは、ほとんど年齢差なし。

③家族内のリスク弱者の存在による違い：日本—小学生未満の子どもがいる家庭では、犯罪や交通事故、病気やけがへの不安が高い。小学生の子どもを持つ家庭では、犯罪および収入減少を心配している。病人・身体の不自由なひとのいる家庭では薬の副作用への不安が大きい。アメリカ—小学生を持つ家庭で

は収入減少への不安が高い。病人・身体の不自由なひとのいる家庭では異物混入食品、病気やけが、薬副作用、遺伝子組み換え、原発事故においていずれも不安が高い。

④年収による違い：日本—年収減少、資産減少、老後生活といった経済的リスクに関して、世帯年収による違いが見られる。年収が低くなるほど不安は高くなっている。薬副作用も同様。アメリカ—年収減少、資産減少に関して年収が低くなるほど不安は高くなっている。遺伝子組み換え、薬副作用、原発事故、ネット誹謗中傷については逆に年収高いほど不安。

⑤生活価値による違い：日本—「生活のなかで一番大切にしていること」として、家族に関することがら（家族関係の安定、子どもの教育、健康など）をあげたひとは、交通事故や犯罪や病気・けがなど伝統的なリスクおよび薬害・食品への異物の混入を不安に思う傾向があった。経済的・物質的なこと（収入や資産の充実、被服や耐久消費財の充実、住生活の充実など）に大切さをおくひとは、経済的リスクへの不安を強く感じている。また、つながり・共生に関することがら（自然とのふれあい、友人とのつきあい、地域でのつきあいなど）を重視するひとは、遺伝子組み換え食品や地球温暖化といった新しいリスクへの不安の程度が高い傾向が見られる。

(3) 生活者のリスク対処

リスク対処の実態を把握するために、リスク情報の入手、リスクコントロール（防犯、防災、健康管理を行う等）、リスクファイナンス（保険に入る、不慮の出来事に備えて貯蓄する等）についてそれぞれの実施状況をたずねたところ、日本ではとくにリスクファイナンスはよく実施されている。にもかかわらず、リスク対処の自己評価（「不慮の出来事に対するあなたの家庭での備えや対策の効果について、総合的にどのように評価しているか」に対する10点満点による回答）は米国に比べて低い傾向が見られた。

このように、わが国の生活者は自助によるリスク対処の効果をおおむね米国の生活者に比べて低く評価している。また、自助意識も比較的低いという結果となった。

かといって公助や共助への期待が大きいわけではない。「以下のそれぞれのリスク（地震、犯罪被害、老後生活、薬害、ネット犯罪の5項目）に関して、その防止対策や実際に被害を受けた場合の復旧対策において、あなたにとって〇〇（国（行政）、市町村（地方行政）、近隣・地域の人たち）はどれくらい頼りになると思うか」（「かなり頼りになる」から「まったく頼りにならない」の4件尺度による回答）との設問への回答は、5項目のいずれについても、公助・共助ともに日本が

もっとも否定的なもの(「頼りにならない」と答える割合が高い)であった。

(4) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクトおよび今後の展望

上記の結果から、日本人はリスクに対する強い不安を持っていること、安心を志向していること、自らリスク対処を実践してもそれをなかなか払拭できずにいること、かといって公助や共助にも大きな期待を持たずにいることが分かる。

このことは、日本の回答者の生活全般への満足度は比較的低いことと無関係ではない。

「現在のあなたのくらし全般についてどの程度満足しているか(10点満点で回答)」の回答結果は日本のそれが低くなっている。そして生活全般への満足度はそれぞれ、生活リスクへの不安の程度と負の、リスク対処の自己評価と正の相関を持っている。

これらの研究成果から次のことが言える。わが国の生活者の生活の質を高めるために「安全・安心を実現する」ことは不可欠である。それはそのとおりであるが、安全と安心の違いを丁寧に整理した議論や対策が求められよう。また、ひとによって安心(不安)の感じ方が違うことから、生活者に応じたさらにきめ細かい対策が必要となってくる。

この知見については、次項にあるとおり国内外の学会で研究報告を行った。また学術の領域以外でも、研究代表者が委員を務める文部科学省安全・安心科学技術委員会において、同知見を踏まえつつ、生活者の立場からの今後の安全・安心科学技術政策について意見を述べている。さらに、いくつかの地方自治体主催の住民向けの講演会で、生活者が自分たちのリスク認知や対処の特徴を理解すること、そしてリスク管理主体になることの重要性を述べてきた。

今後は、生活者のリスク認知や対処の実態を理解したうえでリスクコミュニケーションの展開と実践とに、本研究の成果をつなげていきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

① Yumiko NARA, A Cross-Cultural Study on Risk, Uncertainty, and Information, Journal on New Mathematics and Natural Computation, World Scientific, Vol.6, No.2(in print)査読有

② Yumiko NARA, Risk Experience, Information, and Chance Discovery:

Focusing on Earthquakes in China, International Journal on Advanced Intelligence Paradigms, Vol.2, No.2 (in print)査読有

③ 奈良由美子, 中国のひとびとの地震をめぐる意識と対応の実態: 四川大地震前後の変容に焦点をすえて、危険と管理、第40号、pp.100-112(2009)査読有

④ 奈良由美子, 四川大地震の現場にいて—中国のリスク管理に関する一考察—、実践危機管理、第19号、pp.2-8(2008)査読無

⑤ Yumiko NARA, A Cross-Cultural Study on Attitudes toward Risk, Safety and Security, Proceedings of the 12th International Conference on Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems, Part II, LNAI 5178 Springer-Verlag, pp.734-741(2008)査読有

⑥ 奈良由美子, 生活知・科学知とリスクコミュニケーション、危険と管理、第39号、pp.92-105(2007)査読有

⑦ Yumiko NARA, Information Literacy and Everyday Life Risks, Proceedings of the 11th International Conference on Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems (KES2007), Part II, Springer-Verlag, pp.942-949(2007)査読有

⑧ 奈良由美子, 安全・安心とリスク管理、危険と管理、第38号、pp.115-128(2007)査読有

⑨ Yumiko NARA, Trust, Ethics and Social Capital on the Internet: An Empirical Study between Japan, USA and Singapore, Proceedings of the 10th International Conference on Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems (KES2006)Part III, Springer, pp.64-75(2006)査読有

[学会発表] (計 7 件)

① 奈良由美子 (2008年10月11日) 社会・経済システム学会第27回大会「リスク認知・対処の構造と信頼: 日・米・中の質問紙調査を用いた考察」(早稲田大学)

② Yumiko NARA (2008年9月3-5日) The 12th International Conference on Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems (KES2008), “A Cross-Cultural Study on Attitudes toward Risk, Safety and Security” (Zagreb, Croatia)

③ 奈良由美子 (2008年6月28日) 日本リスクプロフェッショナル学会・日本リスクマネジメント学会合同研究会「中国の危機管理

ー 四川大地震の現場にいてー」(江東区産業会館)

④ Yumiko NARA (2007年9月12-14日) The 11th International Conference on Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems (KES2007) , “Information Literacy and Everyday Life Risks” (Salerno, Italy)

⑤ Yumiko NARA (2007年2月22日-28日) “A Study on Trust and Risk in the Internet Community” , Cognitive Science Laboratory, School of Computing and Information Systems (Kingston University London)

⑥ 奈良由美子 (2006年11月25日) 日本リスクマネジメント学会関東部会、「安全・安心と危険・不安についてのー考察」(専修大学)

⑦ Yumiko NARA (2006年10月9日-11日) The 10th International Conference on Knowledge-Based Intelligent Information & Engineering Systems (KES2006) , “Trust, Ethics and Social Capital on the Internet: An Empirical Study between Japan, USA and Singapore” ( Bournemouth International Centre, UK)

[図書] (計 4 件)

① 奈良由美子、社会システムと産業技術 (社会の中の技術システムー社会との関わり方がもたらす新たなリスクへの対処法) (吉田純・杉万俊夫編)、ミマツコーポレーション、「生活者からみたリスク」を担当執筆 (印刷中)

② 奈良由美子・伊勢田哲治、生活知と科学知、放送大学教育振興会 (2009) 223 頁

③ 奈良由美子、消費者と証券投資 (林敏彦・坂井素思・佐賀卓雄編著) 放送大学教育振興会、「生活に潜むリスクに向かい合う」を担当執筆 (2007) 158 頁

④ 奈良由美子、生活とリスク、放送大学教育振興会 (2007) 241 頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

とくになし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奈良由美子 (Yumiko NARA)  
放送大学・教養学部・准教授  
研究者番号 8 0 2 9 4 1 8 0

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者